

研究ノート

## フランス革命とロマン主義の関連性に関する夏目漱石の認識 Sōseki Natsume's Knowledge of the Relation between the French Revolution and Romanticism

呉 勤文 (Ching Wen WU)

筑波大学人文社会科学部 博士後期課程

本稿は、漱石の英文学研究を辿ることを通して、フランス革命とロマン主義に対する漱石の関心の一側面に光を当てる。まず、漱石のノートに記されているマレットの『フランス革命』の読書メモと感想を考察することによって、ルソーの自然権とフランス革命への影響に関する漱石の認識を示した。それから、イギリスロマン派がフランス革命の理念に呼応したことを取り上げている漱石のホイットマン論と、その論述の参考となったエドワード・ダウデンの『文学研究』の内容と対照することで、両者の捉え方の差異を見極めた。最後に、ダウデンの『フランス革命と英文学』の内容と漱石の読書メモを取り上げ、『文学論』におけるフランス革命に呼応した「文界」がイギリスロマン派を指していると指摘した。

This paper presents a survey of Sōseki Natsume's studies on English literature in order to reveal his interest in the relation between the French Revolution and Romanticism. By analyzing Sōseki's notes on Charles Edward Mallet's *The French Revolution* (1897), his concerns regarding Rousseau's concept of natural rights and its influence on the French Revolution are revealed. In his paper on Walt Whitman, Sōseki mentions the Romantics who reacted to ideas arising from the French Revolution. His discussion is based on Edward Dowden's *Studies of Literature* (1789-1877). By comparing the contents of the two papers, the different viewpoints become evident. In addition, through research on Sōseki's notes of Dowden's *The French Revolution and English Literature* (1897), this paper clarifies a point Sōseki mentions in *Literary Theory*: that the literary circle which reacted to the French Revolution was the Romantic school.

キーワード：夏目漱石、フランス革命、ロマン主義、平等、自然

**Keywords:** Sōseki Natsume, French Revolution, Romanticism, Equality, Nature

はじめに

フランス革命に思想的な影響を与えたルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778) の『社会契約論』 (*Du contrat social*, 1762) は、明治15年 (1882) に中江兆民 (1847-1901) によって、和訳『民約論』と漢文の部分訳である『民約訳解』として出版された。『民約論』と『民約訳解』で紹介される自然権の概念は、国会開設に関する明治維新の改革に不満を抱いた士族が起こした自由民権運動 (1874-1887頃) に思想上の素地を与えた。自由民権運動の国会開設の段階で、フランス革命は政府の肩を持った啓蒙

思想家である福沢諭吉の『國會論』によって否定された<sup>1</sup>が、西洋の思想を学ぶ動向は続いていた。

夏目漱石(1867-1916)の青年期は、自由民権運動の最中であつた。彼は大学予備門の頃(明治17年)、欧化風潮の影響で英語の勉強に専念し<sup>2</sup>、明治21年(1888)9月に英文科志望で第一高等中学校本科文科に進学した。翌年に予科の正岡子規(1867-1902)と漢詩文の応答<sup>3</sup>で親交を深めた。12月31日の子規宛書簡の中で、漱石は「この休みには「カーライル」の論文一冊を読みたり。二、三日前より「アルノルド」の『リテレチュア、エンド、ドグマ』と申者を読みかけたり<sup>4</sup>と伝えている。漱石の蔵書を調べれば分かるように、これらの書物は、イギリスの歴史家であるカーライル(Thomas Carlyle, 1795-1881)の『フランス革命史』<sup>5</sup>、及びヴィクトリア朝の耽美派の詩人で文明批評家であるアーノルド(Matthew Arnold, 1822-1888)の『文学とドグマ』(*Literature and Dogma*, 1873)である。漱石は『フランス革命史』からどの影響を受けたか具体的に言及していないが、その読書傾向から彼は確かにフランス革命に対して関心を払っていたのが窺える。

フランス革命に対する漱石の関心を指摘した先行研究として、萩野文隆は漱石のイギリス留学を中心に、彼がフランス旅行で感じたバリの都市空間の宏大さ、その空間で息息するフランスの平等主義的核家族、フランス共和制の安定と社会主義運動の拡張のもとでドレフュス事件におけるドレフュス擁護派の運動の展開、帝国主義に直面した中国の状況に対する漱石の危惧、社会主義に対する漱石の関心など、様々な側面で考察を行った<sup>6</sup>。だが、漱石が英文学研究を通してフランス革命とその背景に触れたことは、今まで取り上げられてこなかった。本稿は、漱石の英文学研究を中心に考察し、特にフランス革命とロマン主義の関連性に対する漱石の関心を模索することを目的とする。

## 1. ルソーの自然権への認識

漱石はイギリス留学の間に、イギリスの歴史家で政治家であるマレット(Sir Charles Edward Mallet, 1862-1947)が著した『フランス革命』(*The French Revolution*, 1897)を購入して読んだ。マレットは『フランス革命』の第二章で、フランスの進歩的な知識人であるデイドロ(Denis Diderot, 1713-1784)、ヴォルテール(Voltaire, 1694-1778)、ルソー(Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778)、モンテスキュー(Montesquieu, 1689-1755)らが、『百科全書』(*L'Encyclopédie*, 1751-1772)の編集に携わっていたことを取り上げている。

マレットによると、百科全書派と呼ばれたこれらの知識人は教会の権威化と腐敗を批判し、「平等」(equality)の理念を社会階層が固まった世に訴えていた。その中で、神への信仰心を抱いたルソーは、ヴォルテールの知識と芸術上の造詣及びデイドロの宗教批判を批判し、フランス哲学者のエルヴェシウス(Claude-Adrien Helvétius, 1715-1771)の功利主義と唯物主義に憤っていた。そのため、ルソーは百科全書派を脱退し、『人間不平等起源論』(*Discours sur l'origine de et les fondements l'inégalité parmi les*

<sup>1</sup> 福沢諭吉は『國會論』(明治12年8月)で次のように述べている。「國會を開く時は今尚ほ早し須らく人民智徳の發達を待たざる可らず其之を待つ間に漸次其準備を整へざる可らず試に看よ夫の佛蘭西の騷亂は過激の黨派國會を急にしたるが為に其禍は竟に國王を弑するに至りて嘗て微功を奏せず却て臭名を天下後世に遺したる非ずや」(『福沢全集』第八卷、国民図書、1925年、376頁。)小宮洋『夏目漱石の明治一自由民権運動と「大逆」事件を中心にして一』(風詠社、2018年、59頁)は、漱石の青年時代における自由民権の関連性についてその背景となる史料を詳しく調べ、『國會論』を取り上げている。

<sup>2</sup> 夏目漱石「落第」(『漱石全集』二十五卷、岩波書店、2018年、182頁。)では、「文明開化」のために、兄に英語の勉強を勧められ、親しみを覚えた漢籍の世界からしばらく離れたことが述べられている。

<sup>3</sup> 漱石は明治22年5月27日正岡子規宛の書簡で、子規の『七草集』を読んでいと書いている。また、8月3日の書簡で房総半島旅行の感想を書き、9月15日の書簡で紀行文(『木屑録』)を書く意欲を伝えた。(『漱石全集』二十二卷、岩波書店、2019年、4~9頁。)

<sup>4</sup> 『漱石全集』二十二卷、11頁。

<sup>5</sup> 漱石の蔵書の中にあるカーライルの五冊(『漱石全集』二十七卷、岩波書店、2020年。「漱石山房蔵書目録」に記載されている版に拠る。)では、刊行年で判断すれば、Carlyle, T. *The French Revolution*. London: G. Routledge & Sons, 1888. が当時、丸善を通して購入したものだと考えられる。

<sup>6</sup> 萩野文隆「夏目漱石とフランス：平等主義と自由主義」『世界文学』126号、2017年12月、23~24頁。

*hommes*, 1755) を著した。この本で、「平等」という概念を神の与えた争いのない自然状態として定義し、その上で社会の組織そのものが階層を作ったために人間同士の不平等をもたらしたという認識を示し、世界が単純な牧歌的自然に立ち戻ることを要請した。

しかし、ルソーの「自然に帰れ」(Retournons à la nature) の思想は、人間の社会の構成において実現不可能な理想に過ぎない。そのため、ルソーは「自然状態の社会」の構想を考えはじめ、イギリスの政治哲学者であるホブズ (Thomas Hobbes, 1588-1679)、経験論哲学者であるロック (John Locke, 1632-1704) の「社会契約」の考え方を継承し、さらに市民の自由と権力分立の説を示したモンテスキューの『法の精神』(*De l'Esprit des lois*, 1748) の思想を踏まえて、『人間不平等起源論』の続編である『社会契約論』(*Du Contrat social*, 1762) を著した。『社会契約論』は、自然状態にいる個人が有徳で理性的であり、「平等」で自由な存在であることを前提とした。キリスト教の兄弟愛で繋がる「平等」な個人が全体としての共同体の共同意志に身を委ねると論じる一方、市民との直接の契約関係を持つ政府が主権を略奪する場合、主権奪還のために個人としての市民には自由を回復するための革命を起こす権利があると主張する。<sup>7</sup>

漱石は『フランス革命』の第二章の内容を読んで、読書のメモであるノート「Suggestion」の項目で、次のように記述している。

French Revolution / cause:—

(1) Rousseau. social contract

Montesquieu

Voltaire

Diderot

Encyclopaedists

see Mallet *The French Revolution* ch.II

(2) social condition— Each class lived apart, entrenched in its own chilling traditions. Mallet 26<sup>8</sup>

この記述から、漱石はマレットの著作を読むことを通して、フランス革命の起因が百科全書派の啓蒙思想、ルソーの『社会契約論』、そして異なる階層の人間の相互無関心にあるのを認識したのが窺える。ルソーは『人間不平等起源論』、『社会契約論』と三部作をなした教育小説である『エミール』(*Emile*, 1762) に描かれる理神論の思想のために、パリ大学神学院に断罪され、パリ高等法院に逮捕状を出された。彼はヨーロッパで転々とした亡命生活を経て、フランスに戻る際に貴族や友人のミラボー (Honoré Gabriel Riqueti de, comte Mirabeau, 1749-1791) の庇護を求めた。ルソーの死後、飢饉で餓死に瀕する社会低層に対する王室と貴族の無関心がフランス革命の導火線となった。階級打破を目指すジャコバン派は、ルソーの『社会契約論』に基づき、「自由、平等、博愛」という理念を『人権宣言』に掲げた。

しかし、マレットが指摘した<sup>9</sup>ように、ルソーの『社会契約論』の論理は、個人の意思を直接に反映し、議会民主制を否定するため、小型国家にしか適用できない。ジャコバン派は、人間性 (human nature) に無限の信頼を置くルソーの自然権の人間中心主義を信奉し、過激な共和主義を推進した。そのため、過去の時代や貴族社会に対する軽蔑がヨーロッパ中に広まり、ロベスピエールらの恐怖政治をもたらした。漱石はマレットの説明を通して、フランス革命の歴史的教訓を知り、ノート「Suggestion」で、さらに次の読書メモを取った。

Rousseau, 平等説, 自然説ヲ主張スルニモ関セズ彼自身ノ説ヲ彼自身ノ行為ニ於テ之ヲ破リ又之

<sup>7</sup> Mallet, C.E. *The French Revolution* (University Extension Manuals). London: J. Murray. 1897. pp.26-39. (『漱石全集』二十七巻、岩波書店、2020年。「漱石山房蔵書目録」に記載されている版に拠る。)

<sup>8</sup> 『漱石全集』二十一巻、岩波書店、2018年、150頁。

<sup>9</sup> *The French Revolution*. pp.40-41.

ヲ破ラザルヲ得ズ之ヲ奉ズル者又然リ 之ヲ調和セントセル者 Mirabeau アリ  
Mallet, p124-127

equality ノ弊ハ Jacobin idealists ノヤル事ニテ分ル .moral disorder トナル convention ヲ proscribe ス  
レバ discipline モ self-restraint モナクナルナリ . Mallet *French Revolution* 229ヲ見ヨ . 日本ノ現時ノ有様  
ト比較セヨ<sup>10</sup>

ノートの第一段落における「彼自身ノ説ヲ彼自身ノ行為に於テ之ヲ破リ」という記述は、ルソーが貴族などの庇護を求めることを指している。ルイ十六世は国民会議の提案を破棄したため、市民階級の代表する第三身分議員は、国民議会から分離して自らコミューンとなして独立したが、コミューンの組織の不健全のために、野心的な政治家による独裁が形成された。漱石はジャコバン派の独裁の形成過程を取り上げた『フランス革命』の第九章も読んだ。ノートの二行目の記述に示されている「之ヲ奉ズル者又然リ」という記述は、ルソーの自然権の実現を理想として独裁に走ったジャコバン派の問題を指している。

経済学者の父によって育てられ、ルソーの友人であるミラボーは、フランス革命初期の国民会議で君主制を導入しようとした温和派の政治家である。マレットの『フランス革命』の第五章の説明によると、ミラボーは『人権宣言』の抽象的なスローガンに興味がなく、王室を廃除することも意図しなかった。彼は法制度の不正と不公平、個人の利権を侵害する経済法などの問題を解決できるような穏健な組織の創出のために奔走した。フランス革命の原因を見抜いて、階層間の相互理解と協力を求めるために、国王にフランス革命派の民衆と調和的な立場を取るよう要請した。しかし、ミラボーの提案は貴族のラファイエット (Gilbert du Motier de La Fayette, 1757-1834) に冷たく拒否された。経済問題に関するミラボーの対策は、周囲から信頼を得ていくつかの政策を成り立たせた。彼は病死するまで、国王の行政機関を幾度も外交危機から救った<sup>11</sup>。マレットは、フランス革命は「平等」を実現させるのではなく、道徳の混乱をもたらしたと指摘し、規律と自制が社会慣習の美德であると指摘した<sup>12</sup>。

現実に見据えたミラボーの組織力との対照の中で、漱石は組織の不健全によって民衆とのコミュニケーションが機能しなくなったために、ジャコバン派の「平等」の理想が階級打破を目指す独裁恐怖政治に変わったということ認識し、ルソーの自然権における「equality ノ弊」を考えた。フランス革命のもたらした恐怖政治は今日でも個人主義の行き過ぎの鑑として見なされるが、「自由、平等、博愛」という理念は評価され続けてきた<sup>13</sup>。

漱石の読書メモの一つであるノート「Nature」の最後の部分に、ルソーの「自然」に関する以下の認識が示されている。

England deism a religion of nature.  
traditional phraseology.  
Rousseau's nature—to do away with kings, nobles and priests  
—accumulated rubbish of obsolete institution  
—natural state of society  
—reason instead of tradition<sup>14</sup>

(筆者による日本語訳: イギリスの一神教、自然の信仰、伝統的な修辞。ルソーの自然—国王、貴族、聖職者、並びに旧式の社会機関の旧弊を除去する。自然状態の社会。伝統よりも理性。)

<sup>10</sup> 『漱石全集』二十一巻、152～153頁。

<sup>11</sup> *The French Revolution*. pp.119-126.

<sup>12</sup> *The French Revolution*. p.229.

<sup>13</sup> Ben-Israel, H. *English Historians on the French Revolution*. Cambridge University Press. 1986. p.110.

<sup>14</sup> 『漱石全集』二十一巻、455頁。

上掲の内容は、ルソーの自然権への認識の反映であり、マレットが捉えたルソーの自然権の影響に近い。書名は記されない<sup>15</sup>が、筆者の考察では、イギリスの文学史家であるレスリー・スティーヴン (Leslie Stephen, 1832-1904) の『十八世紀イギリス思想史』 (*History of English Thought in the Eighteenth Century*, 1876) の内容<sup>16</sup>と一致している。漱石は『十八世紀イギリス思想史』を読んで、あらゆる階層社会を打ち壊して、一神教の理性に基づいた自然状態の社会を求めるルソーの自然権に関する認識をノートに記しているのである。実際にノート「Nature」は、漱石が様々な文学史 (例えば、イェール大学の教授であるピアーズの『十八世紀イギリスロマン主義』、『十九世紀イギリスロマン主義』、デンマークの評論家であるブランデスの『十九世紀文学主潮』) や著書を読んで記した読書の内容である。同ノートでは、十八～十九世紀のロマン主義思潮を軸にして、イギリスロマン派、フランスロマン派、ドイツロマン派の詩や小説の自然描写の特色が記述されている。このノートでルソーの自然権に関する認識が併記されているのは、フランス革命に呼応したイギリスロマン派に対する漱石の学問的関心から理解する必要があるだろう。

## 2. ホイットマン論におけるイギリスロマン派とフランス革命

イギリス留学の前に、漱石はすでにフランス革命に対するイギリスロマン派の呼応に着目し始めた。東京大学文科大学英文科の学生だった彼は、「文壇における平等主義の代表者『ウォルト・ホイットマン』 Walt Whitman の詩について」という論文を発表した。アメリカ民主主義詩人であるホイットマン (Walter Whitman, 1819-1892) についての論文であるが、冒頭ではフランス革命とイギリスロマン派の関係に触れている。

革命主義を政治上に実行せんと企てたるは私人なり之を文学上に發揮したるは英人なり。「バーンス」を読む者は通観一過して其平等論にかぶれたるを知るべし「シェレー」の如きは多言を須たず *Prometheus Unbound* の一篇之を証して余りあらん。「バイロン」に至つては満腔の不平一発して「チャイルドハロルド」となり再発して「ドンジュアン」となり余憤沸々然常に其毛穴より溢れ出すと云ふも可なり。沈着にして旧慣を重んずる英国の詩人が従来面目を一洗して此思想を唱道し中には身を挺んで、此主義の為に打死し位なるに不思議なるかな共和の政を実行し四海同胞の訓へを奉ずる垂米利加にては一人の我は共和国の詩人なりと大呼して名乗り出でたる者なし。<sup>17</sup>

この箇所では、フランス革命との関連として、イギリス前期ロマン派の詩人であるバーンズ (Robert Burns, 1759-96)、及びイギリスロマン派の第二世代に当たるバイロン (George Gordon Byron, 1788-1824)、シェリー (Percy Bysshe Shelley, 1792-1822) が言及されている。漱石のホイットマン論は、アイルランドの批評家であるエドワード・ダウデン (Edward Dowden, 1843-1913) の『文学研究』 (*Studies*

<sup>15</sup> このノートの内容について、『漱石全集』二十一巻 (岩波書店、2018年、455頁) でも注釈がなされていない。

<sup>16</sup> Stephen, L. *History of English Thought in the Eighteenth Century*. 2 vols. New York: G.D. Putnam's sons, vol. I. 1876. p.449. "To return to nature was with Rousseau and his followers to get rid of kings, nobles, and priests, who could no longer rule or teach. By sweeping away the accumulated rubbish of obsolete institutions, whose authority rested upon blind instinct of reason, we should come upon a pure, simple, reasonable, or 'natural' state of society. The state was vaguely conceived as having possibly existed in some remote past; as being preserved in certain primitive and uncorrupted societies of Alpine peasants, or even savage tribes; or as being that purely ideal state which would be made actual if every political or social institution rested upon pure reason, instead of including an arbitrary traditional element." 実際に漱石は「文壇における平等主義の代表者『ウォルト・ホイットマン』 Walt Whitman の詩について」(明治25年10月、『哲學會雑誌』第68号)と「英國詩人の天地山川に對する觀念」(明治26年3月、『哲學會雑誌』第74～76号)で、すでにレスリー・スティーヴンに言及している。『十八世紀イギリス思想史』は漱石の蔵書に所蔵されていないが、蔵書の紛失か図書館で読んだ可能性が考えられる。

<sup>17</sup> 『漱石全集』十三巻、岩波書店、2018年、3頁。

of Literature 1789-1877) の中の“The Poetry of Democracy: Walt Whitman”を参照<sup>18</sup>し、矢本貞幹が指摘<sup>19</sup>したように、その論の趣旨は「ロマン派とホイットマンの違い」を示すことであるが、先行研究は漱石がホイットマンとロマン派の対比を行うことについて説明を加えていない。イギリスロマン派がフランス革命に呼応したことが取り上げられる理由は、ホイットマン論の中で紹介されている文人同士の繋がり<sup>20</sup>がイギリスロマン派と縁が深かった一方、ダウデンの『文学研究』とも関わるのだろう。

ダウデンの『文学研究』は、フランス革命に対するイギリスロマン派の呼応を序章とし、ホイットマンにおけるアメリカ土着の民主主義の紹介を終章とする。この論述の構成は、ダウデンの論を培った民主主義の形成期におけるアメリカとイギリスの繋がりという前提がある。イギリスの聖職者であるリチャード・プライス (Richard Price, 1723-91) は、アメリカ独立革命に対するイギリスの拒否を批判し、革命思想をイギリスに注ぎ込んだ<sup>21</sup>。彼の唱道によって、フランス革命に対するイギリスの国内の関心が喚起されたのである。

ダウデンは『文学研究』の最初の章である“The French Revolution and Literature”において、フランス革命を連続的な歴史事件として捉え、フランス革命以降のナポレオン強権、フランスに対抗する神聖同盟など一連の政治上の出来事をフランス革命の一部として捉える。その中で、ダウデンはバーンズの「鉄砲事件」に言及した<sup>22</sup>。バーンズは、「自由、平等、博愛」を理念としたフリーメイソン協会の一員としてフランス革命を支持し、イギリスの国家公務員であったにも関わらず、フランス革命を激励するために数丁の鉄砲をフランスの国民会議宛てに送った<sup>23</sup>。漱石はダウデンの論に着眼しながら、スコットランド出身の農民詩人でもあるバーンズの自然詩にフランス革命の「平等」の理念を見出し<sup>24</sup>、ホイットマン論で「「バーンス」を読む者は通観一過して其平等論にかぶれたるを知るべし」と論じている。

さらに、ダウデンは論の続きとして、フランス革命に対するイギリスロマン派詩人であるワーズワース (William Wordsworth, 1770-1850)、コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) の異なる反応を指摘する。ワーズワースはフランス革命の勃発期にフランスを旅行したが、フランス革命への情熱と大虐殺の現実に対する失望のずれに直面し、フランス革命を支持する信念が揺らぎ、キリスト教

<sup>18</sup> 漱石は論文の末尾に、「幸に「ダウデン」の論文を閲覧の事を得て稿を草するの際裨益を受けたこと多し」と明言している。(『漱石全集』十三巻、20頁。)『漱石全集』十三巻における山口久明の注解(583頁)は具体的にダウデンの『文学研究』であると指摘した。『文学研究』は漱石の蔵書に所蔵されないため、漱石が参照した書籍は大学の図書館の蔵書だと考える。ダウデンの論はヨーロッパ文学の影響と詩の形式主義から脱したホイットマンのアメリカ土着の民主主義を紹介するものである。これについて、吉武好孝「夏目漱石のホイットマン受容—E・ダウデンの「ホイットマン論」との関連」(『英学史研究』10号、1977年、1～16頁)が参考になる。また、前掲の萩野の論では、エドワード・ダウデンの論を踏まえた漱石のホイットマン論における「平等」の概念に言及し、漱石がイギリス留学で個人指導を受けたシェイクスピアの研究者であるクレイグ先生がシェイクスピア研究で有名なダウデンの友人であると指摘した。

<sup>19</sup> 矢本貞幹『夏目漱石その英文学的側面』研究社、1971年、25～30頁。

<sup>20</sup> 漱石のホイットマン論では、ホイットマンの『草の葉』(Leaves of Grass, 1855)の詩型が古い形式を脱し、ホイットマンがマイケル・ロセッティ (William Michael Rossetti, 1829-1919)の力を得てイギリスで『ウォルト・ホイットマン詩集』(Selected poems: Walt Whitman, 1868)を刊行し、そしてアメリカでエマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-1882)の評価を得たと紹介されている。(『漱石全集』十三巻、4～5頁。)『ウォルト・ホイットマン詩集』の出版に携わったマイケル・ロセッティは、イギリスロマン派の自然詩に題材を求めるラファエル前派兄弟団の一人である。また、ホイットマンを高く評価したエマソンは、ヨーロッパに渡航した間に、イギリスの歴史家であるカーライルから強い影響を受けた一方、イタリアで会ったイギリスロマン派の第一世代に当たるワーズワース、コールリッジとも交流があった。

<sup>21</sup> Dabundo, L. *Encyclopedia of Romanticism (Routledge Revivals): Culture in Britain, 1780s-1830s*. London: Routledge. 2014. p.466.

<sup>22</sup> Dowden, E. *Studies of Literature 1789-1877*. London: Kegan Paul & Co. 1878. p.10.

<sup>23</sup> 岡地嶺『イギリスロマン主義と啓蒙思想』中央大学出版部、1989年、87頁。

<sup>24</sup> 漱石はこの頃からバーンズの詩集を読み始め、次の年に「英國詩人の天地山川に對する觀念」を発表した。この論文の中で、バーンズの詩の中に流露している自然と動物に対する愛憐の感情に着目して、「「バーンス」は憐愛の極、遂に天地山川を己れと対等視するに至れる」(『漱石全集』十三巻、54頁)というように、自然に対等的な態度を取るバーンズの特徴を捉えた。

信仰に心の慰めを求めることに転じた。一方、コールリッジは、フランス革命に味方として現実を見つめながら、理想平等社会の実現を夢見ていた。この状況を説明してから、ダウデンは革命精神を表現する作品として、ロマン派であるブレイク (William Blake, 1757-1827) の『天国と地獄の結婚』 (*The Marriage of Heaven and Hell*, 1793)、バイロンの『チャイルド・ハロルドの巡礼』 (*Childe Harold's Pilgrimage*, 1812-1818) と『ドン・ジュアン』 (*Don Juan*, 1819-1824)、及びシェリーの『プロメテウス解縛』 (*Prometheus Unbound*, 1820) を取り上げている<sup>25</sup>。作品の引用の特徴から、漱石のホイットマン論の冒頭がダウデンの論を踏まえているのが窺える。ここで特に漱石も取り上げたバイロンとシェリーの革命詩<sup>26</sup>に着目する。

バイロンはフランス革命の勃発期に生まれ、バーンズの後の世代である。バイロンが物心がつく頃、恐怖と独裁がすでにフランス革命の理想に取って代わったため、バイロンはフランス革命後のナポレオン戦争に圧迫された弱小民族の解放運動を支持した。彼の長編詩『チャイルド・ハロルドの巡礼』と『ドン・ジュアン』では、支配階級と調和しない主人公の放浪生活が描かれている。特に、『チャイルド・ハロルドの巡礼』では、フランス革命とその後の政治の動きに関する次の考えが示されている。

But France got drunk with blood to vomit crime,  
And fatal have her Saturnalia been  
To Freedom's cause, in every age and clime;  
Because the deadly days which we have seen,  
And vile Ambition, that built up between  
Man and his hopes an adamant wall,  
And the base pageant last upon the scene,  
Are grown upon the pretext for the eternal thrall  
Which nips life's tree, and dooms man's worst —his second fall.<sup>27</sup>

(しかしフランスは悪酔いして 血と犯罪を吐きだした  
ローマのサター祭は いつでも「自由」の主張に致命的であった  
なぜなら われらが見た生き地獄〔恐怖政治〕と  
悪らつな〔ナポレオンの〕野心は 人類と人類の希望との間に  
堅牢無比の絶壁を打ち建ててしまったからだ  
そして舞台最後の下品な〔ナポレオンの〕山車が  
永遠の奴隷の口実とされるからだ  
それが 生命の木を枯らし 人類最悪の墮落  
すなわち第二の〔神聖同盟〕の墮落を 運命づけるのだ<sup>28</sup>)

ダウデンは『文学研究』で『チャイルド・ハロルドの巡礼』の内容を引用していないが、バイロンがフランス革命に関する僅かな表現の中で、フランス革命、ナポレオン強権、フランスに対抗する神聖同盟に対して不審を示したことを指摘している<sup>29</sup>。バイロンの『ドン・ジュアン』はイギリスの支配階級への不満を表現しているが、ダウデンは『ドン・ジュアン』のエゴイスティックなバイロニック

<sup>25</sup> *Studies of Literature 1789-1877*. pp.1-43.

<sup>26</sup> ダウデンが提起した作品の情報を補足するために、岡地嶺の『イギリスロマン主義と啓蒙思想』の指摘(91-93頁)を参照して、バイロンの『チャイルド・ハロルドの巡礼』とシェリーの『プロメテウス解縛』におけるフランス革命に関する描写を取り上げる。

<sup>27</sup> Byron, G.G. *Childe Harold's Pilgrimage: A Romance: and Other Poems*. London: John Murray. 1818. p.51.

<sup>28</sup> 『チャイルド・ハロルドの巡礼』の日本語訳は、東中稜代『チャイルド・ハロルドの巡礼—物語詩』(1994)があるが、岡地嶺の『イギリスロマン主義と啓蒙思想』(93頁)は、バイロンの革命詩を取り上げる際に、注釈を入れる形で翻訳を行い、詩の表現意図と歴史的出来事の関連性を分かりやすく訳している。本論における『チャイルド・ハロルドの巡礼』の日本語訳は、岡地訳を引用したものである。

<sup>29</sup> *Studies of Literature 1789-1877*. pp. 24-25.

英雄を形成させる背景を次のように指摘している。

If jarring forces strove in Byron, they strove also in the world around him. One thing he constantly expresses —the individualism of the earlier Revolutionary epoch, and the emptiness and sterility of the life which is merely individual and not social.<sup>30</sup> (筆者による日本語訳：もし、耳障りな勢力がバイロンと争うのであれば、それは同時に彼の周りの世界と争う。バイロンが作品の中で表現し続けるのは、フランス革命初期の個人主義、単に個人的で社会的ではない人生の空虚と不毛である。)

このように、ダウデンはフランス革命後における社会の無秩序と強権の躍起が個人主義を重んじるバイロンに厭世感情を促したことを説明している。彼はその次に、イギリスロマン派の詩集を編集したアーノルドの『批評論』(*Essays in Criticism*, 1865)の観点を踏まえて、バイロンの詩にはキリスト教の教養があまり見られず、彼の文学的特質は彼自身に属するものであるため、次の世代に受容されにくいと捉える一方、バイロンの作品が十九世紀初期の厭世感情を明確に表現するものであると指摘<sup>31</sup>した。さらに、バイロンとの対比として、その出身がフランス革命の一連の出来事と重なるシェリーのことを次のように取り上げている。

Byron is the truest representative in our literature of the Revolution as a realized historical series of events. Certainly, the representative of the Revolution in its pure ideal is not Byron but Shelley.<sup>32</sup> (筆者による日本語訳：われらの文学において、バイロンは革命という連続の歴史的な事件の実現を表現する真の代表者である。確かに、革命を純粹で理想的なものとして表現する代表者はシェリーであり、バイロンではない。)

シェリーは、ホイッグ的家系に生まれ、国教会が支配したオックスフォード大学ユニヴァーシティカレッジに入学したが、宗教的不寛容の環境で無政府主義の先駆者であるゴドウィン (William Godwin, 1756-1836) の『政治的正義』(*An Enquiry Concerning Political Justice*, 1793)に出会い、その社会改革の精神より革命に共感した<sup>33</sup>。シェリーの革命詩は、『マブ女王』(*Queen Mab*, 1813)、『イスラムの反乱』(*The Revolt of Islam*, 1817)、『ロザリンドとヘレン』(*Rosalind and Helen: A Modern Eclogue*, 1819)、『プロメテウス解縛』などが挙げられる。ここで特に漱石も言及した『プロメテウス解縛』と革命の関連性に着目する。

ギリシア神話の中で、プロメテウスは弱い人間を愛し、人間のために天から火を盗んで人間に火の使い方を教えたが、天の神であるゼウス (Zeus) に罰せられ、スキティア (Scythia) の山に縛り付けられる。シェリーは、ゼウスをジュピター (Jupiter) として描き、ジュピターの王座がギリシア神話で悪魔として扱われるデモゴゴン (Demogorgon) に取られたことで、プロメテウスが鎖から解き離れて自然の精霊の祝福を得ると描いている。『プロメテウス解縛』の第三幕で、フランス革命の「平等」の理念が次のように書かれている。

The loathsome mask has fallen, the man remains  
Sceptreless, free, uncircumscribed, but man  
Equal, unclassed, tribeless, and nationless,  
Exempt from awe, worship, degree, the king

<sup>30</sup> *Studies of Literature 1789-1877*. p.26.

<sup>31</sup> *Studies of Literature 1789-1877*. p.27.

<sup>32</sup> *Studies of Literature 1789-1877*. p.28.

<sup>33</sup> 坂口周作『シェリーの世界—詩と「改革」のレトリック—』金星堂、1986年、17～33頁。

Over himself; just, gentle, wise; but man<sup>34</sup>

(厭わしい仮面が落ち、人は  
王笏なく、自由で、囲われぬまま——しかし人であり  
平等で、階級もなく、部族もなく、国もなく  
畏怖も、崇拜も、位階もなく——〈王〉は  
自己を律し、正しく、優しく、賢く——しかし人のまま。<sup>35</sup>)

ダウデンは『プロメテウス解縛』を取り上げて、“In the “Prometheus” ages must pass away before the tyrant falls, and the deliverer is unbound; but the day of rejoicing is certain, even if it be far off, and in the end it will come with sudden glory.”<sup>36</sup> (筆者による日本語訳：『プロメテウス』の中で、暴君が下りて火の伝達者が解縛されるまで歳月が経つ。しかし、喜びが訪れる日は確かである。それが遙か彼方であっても、結末において栄光は必ず訪れる。)とコメントしている。

漱石のホイットマン論の冒頭とダウデンの論の内容を対照すれば分かるように、漱石はダウデンの論を読んでバイロンの特色を認識し、ホイットマン論でその「満腔の不平」を取り上げている。ダウデンが言及したシェリーの多くの革命詩の中で、特にギリシア神話を背景とした『プロメテウス解縛』に着眼していた。そのために、ホイットマン論の続きにおいて、過去の題材や詩型に拘らないホイットマンの特色との対比として、「[バイロン]」「シエレー」は革命の詩人なり去れども十九世紀を改良し数百年来の旧弊を一掃したる上に希臘古代の分子を注入せざれば其理想を満足せしむる能はざらん<sup>37</sup>と論じている。

詩の題材への着目以外に、漱石は革命と人生観の関わりについて、次のようにバイロン、シェリー、ホイットマンの違いを論じている。

彼の「サラミス」の巖頭に箕坐して “For Greece a blush——for Greece a tear” と叫び世の味気なきを嘆じて “Out of the day and night/ A joy has taken flight” と悲んだる詩人等浮世を観ずること「ホイットマン」の如き能はず。四民同権の主義実行し難きを憤り一は白眼嫉視の旋毛曲りとなり有らゆる厭世の分子を一身に引き受け「ドンジュアン」を公けにして天下を愚弄し余憤洩らす所なく遂に南欧に客死し一は Prometheus Unbound を作つて望を後世に属したりと雖も彼れ卅年の生涯を三分して一分は読書世界に没し一分は空想世界に住し残る一分を挙げては醜悪不埒の世界に委ね不幸薄命を悲んで客土に溺れぬ。此二人説く所の主義「ホイットマン」を去ること遠からず而るに其世界観とて斯の如く異なるや居気を移すが為か養体を移すが為か抑も天稟の氣質に強弱あるが為か時の先後人心に感ずること此の如く甚しきか。余は只「バイロン」の厭世主義を悲んで「ホイットマン」の楽天教を壮とするのみ。<sup>38</sup>

漱石はバイロンの『ドン・ジュアン』の中の一節を引用し、強権に圧迫されていたギリシアの弱小民族に対するバイロンの悲しみを示した。そして、革命の理想に希望を抱いたシェリーの薄命とその詩における虚構性に言及しつつ、シェリーが晩年に書いた“A Lament”（「嘆き」）(Posthumous Poems, 1824)の一節を引用し、『プロメテウス解縛』における王に圧迫されることの悲しみを取上げた。それによって、二人の詩人の人生観がアメリカ大陸で平等と独立を享受するホイットマンの楽天思想と異なると捉えている。

つまり、漱石がダウデンの論を参照して、フランス革命に対するイギリスロマン派の呼応を取り上

<sup>34</sup> Shelley, P. B. *Prometheus Unbound: A Lyrical Drama in Four Acts with Other Poems*. London: C. and J. Ollier. 1820. p.120.

<sup>35</sup> アルヴィン宮本なほ子編『シェリー詩集』岩波文庫、2013年、91頁。

<sup>36</sup> *Studies of Literature 1789-1877*. p.32.

<sup>37</sup> 『漱石全集』十三巻、7頁。

<sup>38</sup> 『漱石全集』十三巻、8頁。

げるのは、半世紀に渡る民主主義の展開の違いを示しつつ、ホイットマンの「平等主義」がアメリカ共和国の「独立の精神」の上に成り立ち、未来に向かうその楽天的な「平等主義」が進化論の史観を体現していると論じるためである。ヨーロッパの複雑な政治情勢とアメリカの新天地の違いが詩人の人生と文学の表現に影響を与えたはずだが、漱石はホイットマンの楽天主張のほうを評価した。彼は、「[ホイットマン]は共和国の詩人なり。共和国に門閥なく上下なく華士族新平民の区別なし」<sup>39</sup>というように、「平等」を求めるホイットマンの楽天主張を明治社会の状況と照らし合わせることによって、明治維新の「四民平等」の理想を喚起しようとした。

以上の考察から、ダウデンの『文学研究』で取り上げられたフランス革命の「自由・平等・博愛」の理念に対するイギリスロマン派の呼応が、漱石によってホイットマンの「平等」思想との対照になっていたことが窺える。漱石はイギリス留学の間に、前掲のマレットの『フランス革命』に触れることで、イギリスロマン派の革命精神を培ったフランス革命の思想的背景とヨーロッパに広まった恐怖政治の現実に関する認識を深めたのである。

### 3. 『フランス革命と英文学』の影響

漱石の蔵書の中で、ダウデンのもう一冊の著作、『フランス革命と英文学』（*The French Revolution and English Literature*, 1897）が所蔵されている。漱石のノート「現代 art」の冒頭には、「現代 art 余云フ French Revolution ノ結果 democratic movement ノ結果ナリ」<sup>40</sup>という記述が見られる。同ノートを調べると、ロマン派の作品に関する記述（例えば、「Byron—anti-social」<sup>41</sup>）が見られるほかに、ダウデンの『フランス革命と英文学』の内容もメモされている。この読書メモから、『フランス革命と英文学』がイギリス留学の時に親しんだ文献であるのが分かる。

ダウデンは第一章“Precursors of Revolution”において、自然の一部である人間を科学の研究対象とするという考えについて、イギリスの歴史家であるバックル（Henry Thomas Buckle, 1821-1862）の『イギリス文明史』（*History of Civilization in England*, 1858）、及びダーウィンの生物進化論を取り入れて社会組織における宗教の役割を重要視する社会学者であるベンジャミン・キッド（Benjamin Kidd, 1858-1916）の『社会の進化』（*Social Evolution*, 1894）を重要な著作として取り上げている<sup>42</sup>。ダウデンはこれらの著作に見られる歴史研究の方法<sup>43</sup>を踏まえつつ、人間の完全性を求めるキリスト教の教義に対して、フランス革命以前にヨーロッパに広まりつつあった人間感情の解放運動が起きていたことに着目した。特に文学の分野において、センチメンタリズムを表現する作品として、ルソーの『新エロイズ』（*Julie ou la Nouvelle Héloïse*, 1761）、ドイツロマン派であるゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832）の『若きウェルテルの悩み』（*Die Leiden des jungen Werthers*, 1774）、イギリスのセンチメンタリズム小説家であるスターン（Laurence Sterne, 1713-1768）の『トリストラム・シャンディ』（*The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman*, 1759-67）を取り上げた。そして、個人の感情を優先させることが社会秩序の崩壊を招きかねないと捉える一方、個人の感情の重視が、徐々に他者への「同情」の感情と結び合っ、社会秩序の安定を導く新たな「博愛」の精神を形成させ、人間性（human

<sup>39</sup> 『漱石全集』十三巻、10頁。

<sup>40</sup> 『漱石全集』二十一巻、642頁。

<sup>41</sup> 『漱石全集』二十一巻、643頁。

<sup>42</sup> Dowden, E. *The French Revolution and English Literature*. London: Kegan Paul, Trench, Trübner & Co. 1897. p.6.（『漱石全集』二十七巻、岩波書店、2020年、「漱石山房蔵書目録」に記載されている版に拠る。）

<sup>43</sup> 漱石は明治35年3月15日に義理の父である中根重一宛書簡の中で、「目下日夜読書とノートをとる」、「（前略）開化を構造する諸元素を解剖して其聯合して発展する方向よりして文芸の開化に及す影響及其何物かを論ず」の積りに侯様様な大き〔な〕事故故哲学にも歴史にも政治にも心理にも生物学にも進化論にも関係致候」と述べている。（『漱石全集』二十二巻、岩波書店、2019年、274頁。） 漱石の蔵書を調べれば、漱石がダウデンの著書を読んで、当時のイギリスの社会背景と進化論を理解するために、『イギリス文明史』、『社会の進化』も購入して読んでいたということが推論できる。（『漱石全集』二十七巻（岩波書店、2020年）の蔵書目録を参照する。）

nature) が重要視されるようになり、人間性の重視がフランス革命を促す一つの原因となったと指摘した<sup>44</sup>。つまり、ダウデンの『フランス革命と英文学』はヨーロッパロマン主義における感情の解放の側面を新しい着眼点として、文学の分野から歴史を考察するものである。

漱石は『フランス革命と英文学』を読んで、ノート「現代 art」で「情ヲシテ博愛主義ナラシメタリ」<sup>45</sup>というように、ダウデンの観点を記述した。その上で、ダウデンがフランス革命を促したルソーの「自然に帰れ」(Retournons à la nature) を“return to nature”<sup>46</sup>として取り上げたことを次のように記述している。

○革命ハ如何ナルコトヲ意味スルカ. a return to nature ナリ Dowden p.14ニ其意味ヲ説明セリ

- (1) 人工的煩瑣の生活, 宮庭, 教会—深林, 野谷ノ気楽ナル生活
- (2) 人工的美・園芸—天然美
- (3) 大官公卿ノ感情—田夫野人ノ感情モ自然ニシテ咏フベシ
- (4) 位階勳爵アル古ニ尊カラズ—人間ナルガ故ニ尊シ
- (5) 束縛, 権威—自由 (無限)<sup>47</sup>

ダウデンの捉え方を見れば、“a recognition in politics of man as man”<sup>48</sup> (政治における人間の利権への承認) という捉え方は、明らかにルソーの自然権とフランス革命の理想を指している。一方、漱石のメモにも見られる田舎の自然美に対する愛着、感情の重視、自由の追求という要素は、ルソーの「自然に帰れ」の特質とも、フランス革命前後のイギリスのナチュラリズムの特質とも言える。イギリス社会はナチュラリズムの発展の中でルソーの「自然に帰れ」に似ているような特質が徐々に形成していたが、それはフランス革命のような階級打破に繋がらなかった。この傾向について、ダウデンはフランス革命に対するイギリス前期ロマン派の詩人であるクーパー (William Cowper, 1731-1800) の反感を取り上げる一方、フランス革命が起こる以前の自然詩の感情表現に着目し、“feeling for simplification and his humanitarian sentiment that Cowper belongs to the Revolution.”<sup>49</sup> (筆者による日本語訳: 平易化を求める情緒と人道主義の感性という特質から見れば、クーパーは革命の側に属する) と捉えている。

漱石は『フランス革命と英文学』の第一章以外に、特に第四章 “Early Revolutionary Group and Antagonists” を読んでノートでメモを取った。ダウデンは第四章で前期ロマン派詩人の一人であるバーンズの「鉄砲事件」をより詳しく述べ、フランス革命に同情を示すバーンズの詩である「傲慢なガリアの侵入は脅威か」 (“Does Haughty Gaul Invasion Threat?”, 1795) を取り上げた。さらに、バーンズの詩に見られる感情の流露について、“Burns, the peasant-poet of Equality, was interpreting the new passions of the age”<sup>50</sup> (筆者による日本語訳: 「平等」の理念を示す農夫詩人バーンズは、新しい時代のパッションを解釈していた) と捉えている。漱石のノートでは、「Burns (Dowden 142) less romantic than passionate. 理屈主義ヨリ革命ニ同情ヲ表セシニアラズ equality ノ反上流, 村舎ノ幸福」<sup>51</sup> という記述が見られる。革命に対するバーンズのパッションに着目した点はダウデンと一致している。

ダウデンはバーンズに続いて、フランス革命に呼応したワーズワース、コールリッジ、そして同じくロマン派であるサウジー (Robert Southey, 1774-1843) の名を取り上げた。ワーズワースはフランス革命に希望を抱いて恐怖政治の現実に直面した結果、神のいる「自然」(万有神論) に救済を求める

<sup>44</sup> *The French Revolution and English Literature*. pp.8-9.

<sup>45</sup> 『漱石全集』二十一巻、652頁。

<sup>46</sup> *The French Revolution and English Literature*. p.13.

<sup>47</sup> 『漱石全集』二十一巻、652頁。

<sup>48</sup> *The French Revolution and English Literature*. p.14.

<sup>49</sup> *The French Revolution and English Literature*. pp.33-34.

<sup>50</sup> *The French Revolution and English Literature*. p.152.

<sup>51</sup> 『漱石全集』二十一巻、653頁。

ようになり、革命の激動期に創作し始めた『隠士』(*The Recluse*, 1888)、『序曲』(*The Prelude*, 1850)、またその後の『逍遙遊』(*The Excursion*, 1814-16)で個人の感情を詠っても、フランス革命に対する若い頃の興奮感がもはや見られない。ダウデンはこの点を提起しつつ、“Revolution did an injury to art; it tended to convert the poet into a declaimer, a preacher, the missionary of an ill-considered evangel.”<sup>52</sup> (筆者による日本語訳：革命は芸術を傷付ける。革命は詩人を熱弁家、伝道者、熟慮のない福音書の宣教師に改心させる)とコメントした。そしてこの点に関して、コールリッジ、サウジーにおける宗教の探究にも言及した。漱石のノートの同じページでは、この部分に関する記述が見られる。

ダウデンは第五章“Recovery and Reaction: Wordsworth And His Friends”で、フランス革命を経験したワーズワースにおける自然の救済について詳述するが、ワーズワースが革命の最中に書いた「フランス革命へのお詫び」(“An Apology for the French Revolution”, 1793)を取り上げて、彼がルイ十六世の処刑を是認したことを指摘<sup>53</sup>した。ワーズワースの文章は若い頃におけるフランス革命への情熱を示す例であるが、ダウデンは彼の考えに潜む暴力性を見出した。そして、漱石は革命に呼応したロマン派のことを「感情」の視点で捉えたダウデンの論を読み、この箇所について、「彼ハ apology for the French Revolution ヲカキ又 Louis XVI 刑戮ヲ是認セリ遂ニ mere speculation ノ愚ヲ悟レリ彼の立脚地ハ analytic intellect ニアラズシテ passionate contemplation ト joy ヨリ来る」<sup>54</sup>というように捉えた。

ダウデンはさらにフランス革命以降の一連の出来事を中心に、第六章“Renewed Revolutionary Advance: Moore, Landor, Byron, Shelley”で、第二期ロマン派の詩人たちの新しい革命精神について述べている。本論はバイロンとシェリーの革命精神について前項で示したが、ここで漱石が着目したダウデンの論の箇所を取り上げる。ダウデンは、フランス革命、ナポレオン戦争以降に起きた保守的反動の中で、秩序の回復が優先され、ヨーロッパの大混乱の中で自由は度外視されたということを紹介している<sup>55</sup>。漱石は時勢に関するダウデンの紹介をノートに記し<sup>56</sup>つつ、特にバイロンによって代表される個人の反社会的傾向<sup>57</sup>に着目して、同ノートに「是 Byron ナリ」と記した。

漱石が着目した箇所を見てきたように、彼は『フランス革命と英文学』の読書を通して、フランス革命のもたらした封建社会からの個人の解放と社会秩序の崩壊の両側面を認識していた。漱石の『文学論』(明治40年5月)は、イギリスロマン派の作品を多く例示し、心理学や社会進化論の方法でイギリスロマン派の詩を分析することを論旨とする。その中で、『フランス革命と英文学』は次のように取り上げられている。

仏国革命の如き大狂瀾の、集合意識を冒して自由、平等、四海同胞の観念が一般民衆の意識界の頂点に高く旂旗をかゝぐる時、文界の意識亦之に呼応して、政海の風雲と徴逐せるも亦著しき事実なり。Dowdenの著はせる *The French Revolution and English Literature* は両者の関係を説いて委細なり。<sup>58</sup>

「自由、平等、四海同胞の観念」は、フランス革命の掲げる理念、「自由、平等、博愛」である。「文界の意識亦之に呼応して、政海の風雲と徴逐せる」という表現は、イギリスロマン派がフランス革命に呼応したことを指していると考えられる。

おわりに

<sup>52</sup> *The French Revolution and English Literature*. p.154.

<sup>53</sup> *The French Revolution and English Literature*. p.202.

<sup>54</sup> 『漱石全集』二十一巻、654頁。

<sup>55</sup> “The problem which lay before Europe was how to unite order with freedom; in the reaction the monarchs and their representatives thought of order first, and of freedom little, if at all.” *The French Revolution and English Literature*. p.247.

<sup>56</sup> 『漱石全集』二十一巻、654頁。

<sup>57</sup> “At least one thing remained, —the individual will, and the power of that will to rise in revolt and scorn against the surrounding society.” *The French Revolution and English Literature*. p.260.

<sup>58</sup> 『漱石全集』十四巻、岩波書店、2017年、452頁。

以上のように、フランス革命とロマン派の関連性に関する漱石の認識を考察してきた。漱石はダウデンの『文学研究』を手がかりにしてイギリスロマン派が革命に呼応したことを認識し、イギリス留学中にマレットの『フランス革命』を通してルソーの自然権に関する知識を得て、さらにダウデンの『フランス革命と英文学』を通してヨーロッパロマン主義における感情の解放の側面を認識した。

英文学から摂取したフランス革命の知識は、漱石において近代日本社会の変化を考える手がかりとなった。彼はホイットマン論の中で明治維新の「四民平等」の理想に言及した一方、マレットが『フランス革命』で言及したフランス革命における秩序崩壊の側面について、読書ノートで「日本ノ現時ノ有様ト比較セヨ」と記している。この捉え方から、個人主義の導入が封建社会の秩序に変化をもたらしたことに対する漱石の期待と恐れが窺える。フランス革命における自然権の概念をめぐるこの認識の発生は、明治時代の知識人の心性を知る一つの手がかりとなるだろう。特に個人主義の問題に関して、漱石はどのように東西の文明の差異を考え、その考えを創作に繋げていくのか。これは、フランス革命とロマン主義の関連性という認識の土台の上で、さらに探究されるべき課題であると考えられる。

#### 付記

本稿は、中国文化大学（台湾・台北）日本語文学科主催の国際シンポジウム「日本の言語・文化・思想・宗教・社会・歴史に関する研究と教育」（2019.05.18）での発表原稿に基づき、大幅な修正・加筆を行ったものである。

#### 参考文献

- Byron, G.G. (1818). *Childe Harold's Pilgrimage: A Romaunt: and Other Poems*. London: John Murray.
- Ben-Israel, H. (1986). *English Historians on the French Revolution*. Cambridge University Press.
- Dowden, E. (1878). *Studies of Literature 1789-1877*. London: Kegan Paul & Co.
- Dowden, E. (1897). *The French Revolution and English Literature*. London: Kegan Paul, Trench, Trübner & Co.
- Dabundo, L. (2014) *Encyclopedia of Romanticism (Routledge Revivals): Culture in Britain, 1780s-1830s*. London: Routledge.
- Mallet, C.E. (1897). *The French Revolution* (University Extension Manuals). London: J. Murray.
- Shelley, P. B. (1820). *Prometheus Unbound: A Lyrical Drama in Four Acts with Other Poems*. London: C. and J. Ollier.
- Stephen, L. (1876). *History of English Thought in the Eighteenth Century*. 2vols. New York: G.D. Putnam's sons, vol.1.
- アルヴィン宮本なほ子編 (2013) 『シェリー詩集』 岩波文庫。
- 岡地嶺 (1989) 『イギリスロマン主義と啓蒙思想』 中央大学出版部。
- 小宮洋 (2018) 『夏目漱石の明治—自由民権運動と「大逆」事件を中心に—』 風詠社。
- 坂口周作 (1986) 『シェリーの世界—詩と「改革」のレトリック—』 金星堂。
- 夏目漱石 (2017-2020) 『漱石全集』 岩波書店、全二十八巻、別巻。
- 夏目漱石著 (1969) 『夏目漱石集 2』 (『日本近代文学大系』 25) 角川書店。
- 荻野文隆「夏目漱石とフランス：平等主義と自由主義」(2017.12) 『世界文学』 126号。
- 福沢諭吉 (1925) 『福沢全集』 第八巻、国民図書。
- 矢本貞幹 (1971) 『夏目漱石その英文学的側面』 研究社。
- 吉武好孝 (1977) 「夏目漱石のホイットマン受容—E・ダウデンの「ホイットマン論」との関連」 『英学史研究』 10号。